



**第四十回全日本私立幼稚園連合会  
設置者・園長全国研修大会**

**期日** 令和七年十月二十七日（月）  
二十八日（火）

**会場** 水戸市民会館（茨城県水戸市）  
四百十一名（うち栃幼連加盟  
園からは十五名）

**参加**

# 時 栃 報 幼

題字／栃木県知事 福田富一氏

第 162 号

令和7年12月20日

一般社団法人 栃木県幼稚園連合会

〒320-0032 宇都宮市昭和1-3-10 栃木県庁舎西別館

☎028(622)2821 FAX 028(622)2816

●編集人／齋藤 君世 ●発行人／船田 弘和  
■栃幼連ホームページ <https://www.youchien.or.jp>



## 大会テーマ

「こどもがまんなかの幼児教育の充  
実・発展を考え合う」～社会状況の  
変化を乗り越える園を目指して～

## 記念講演

**演題** 「大切な忘れ物」～昭和世代  
の独り言～

## 講師

茨城県立大洗高等学校  
マーチングバンド部監督

有國 浄光氏

山口県立防府高校、武蔵野音楽大  
学を経て昭和五十年に茨城県立大洗  
高校着任。以来五十一年間にわたつ  
て同校吹奏楽部・マーチング部の指  
導、育成にあたる。平成二十一年、  
茨城県教育委員会からMT（マイス  
ターオブティーチャー）の表彰を受  
ける。平成三十年、  
文部科学省より優秀  
教員表彰。令和元年、  
文化庁長官表彰を受  
ける。  
壇上で大洗高校の  
マーチングバンドの



素晴らしい演奏を披露し、圧巻の演  
奏に会場から喝采を浴びた。

## 行政報告①

**演題** 「幼児教育の現状と課題につ  
いて」

## 講師

文部科学省初等中等教育局  
幼児教育課長 石田 善顕氏

国内の幼児教育の現  
状を説明し、外国人児  
童や特別支援児が年々  
増加傾向にあることを  
示し、幼保小の接続に  
ついては諸外国の実態を説明、地域  
が一体となって取り組むため行政の  
役割の重要性を説いた。質の高い幼  
児教育は将来の所得の向上や生活保  
護受給率の低下につながり、教育の  
効果は受けた本人だけでなく、社会  
に対しても効果が大きいと話された。



## 行政報告②

**演題** 「保育行政の動向について」

## 講師

生育基盤企画課長 横田 愛氏  
幼稚園・保育所・認  
定こども園の現状を説  
明し、保育政策の新た  
な方向性として、地域  
のニーズに対応した質  
の高い保育の確保・充実、保育人材  
の確保にテクノロジー活用による業  
務改善を示した。そして次年度から  
本格実施される「こども誰でも通園  
制度」について意義や準備事務フ  
ローなど全体像を分かりやすく説明  
された。



十月二十八日（火）は四つの研究  
講座が開催された。

- 一、『創りだそう、こどもの未来を  
拓く良質な乳幼児期の教育を』
  - 二、『幼児教育の質に対する振興を  
考える質向上のプランへ「良い  
幼児教育の質とは」質の評価ス  
ケールな策定は可能か？』
  - 三、『あなたの園はその時どう動く  
か』安心・安全な保育のため  
の管理者の備え』
  - 四、『〇、一、二歳児の保育・教育  
を考える』子どもたちの豊かな  
育ちとは』
- 参加者はそれぞれの講座で研修  
し、有意義な二日間となった。

## 栃木米の寄贈

十月二十九日（水）



今年も、全国農業  
協同組合連合会 栃  
木県本部（JA全農  
とちぎ）様より、栃  
木産米三銘柄（コシ  
ヒカリ・なすひかり・  
とちぎの星）が贈呈  
され、栃幼連に加盟  
する園に対して、それぞれ五キロ  
グラムずつ配布された。



米の価格の高騰が懸がれている  
中であつても、「未来を担う子ども  
たちのために県が誇る新米を食べ  
てもらいたい」とい  
う食育の取り組み  
が継続された。  
給食やおやつとし  
て提供するなど、栃  
木米を通して食育  
活動が各園それぞ  
れに広がった。



## 第三十九回全日本私立幼稚園連合会 関東地区代表者協議会 神奈川大会

期日 令和七年十一月六日(木)  
七日(金)

会場 メルキユールホテル横須賀

参加 全日本私立幼稚園連合会関東地区会・神奈川県地区会会員および各県私学行政担当者  
および神奈川県内  
私立幼稚園の設置  
者・理事長・園長  
計百十六名(うち  
栃木県は栃幼連九  
名、県行政担当官  
一名)



### 協議会テーマ

『持続可能な経営を目指し、幼稚園  
だからこそその強みを活かして』

### 研修Ⅰ

テーマ 「令和八年度概算要求につ  
いて」

### 講師

文部科学省初等中等教育局  
幼児教育課 課長  
石田 善顕氏

### テーマ

「子ども誰でも通園制度につ  
いて」

### 講師

こども家庭庁成育局  
保育政策課 山口 貴史氏

### 研修Ⅱ

テーマ 「小栗上野介と横須賀製鉄所  
―横須賀一番物語―」

### 講師

横須賀開国史研究会  
会長 山本 詔一氏

### 研修Ⅲ

テーマ 「その避難訓練形骸化してい  
ませんか?―防災を教育に  
変える園経営戦略―」

### 講師

慶應義塾大学環境情報学部  
准教授 大木 聖子氏



### 研修Ⅳ

#### 各県情報交換会

#### 分科会①

各県行政と団体代表者に  
よる情報交換会

#### 分科会②

市町村対応に関するグ  
ループディスカッション

令和八年度概算要求では、  
大きく三つの柱をもとに解説  
された。

一、幼児期及び幼保小接続期の教育  
の質的向上を支える自治体への  
支援

二、幼児教育の質の向上に関する調  
査研究等

三、幼児教育の質を支える教育環境  
の整備

来々四月から本格始動が始まる  
「子ども誰でも通園制度」の留意点  
として、一時預かり事業との違いが  
述べられた。この制度は、子どもの  
成長のために「通う」という考えを  
基本とするのに対し、一時預かり事  
業は「保護者の立場からの必要性」  
に対応するため「預ける」という考  
えを基本とする。

各県情報交換会  
では、物価高騰対  
策や、医療的ケア  
看護職員配置の補  
助が新たに導入さ  
れてきた県が増え  
てきたことが示さ  
れた。



## 研修会だより

### 設置者・園長研修会

期日 令和七年九月二十六日(金)

会場 ホテル東日本宇都宮(大和・西  
七十一名)

### 参加

内容 「持続可能な園経営」今い  
る教職員を活かす」

### 講師

株式会社福祉総研 KYOS  
T A コンサルチーム

社会保険労務士法人人材総研役員  
園のコンサルタント

安岡 知子氏  
栃木県は未就園児が減少し  
ている中、人口の流出が増加  
しており、特に女性  
が男性の三倍県外へ  
転出してしまってい  
る現状がある。



また、保育士や幼稚園教諭の養成  
校は減少しており、採用難は解消し  
ない。そこで、今いる教職員をもつ  
と生かすことで、様々なメリットが  
あることをお伝えしたい。

まず、パート職員を正規に登用す  
ることで、厚生労働省のキャリアア  
ップ助成金の正社員化支援を受け  
ることができると可能性がある。また、  
パート職員の勤務時間増加と私学共  
済加入により、同じくキャリアアッ  
プ助成金の処遇改善支援を利用する  
こともできる。申請するためには、  
園が県の労働局にキャリアアップ計  
画を提出し、園に正社員化規定が無  
い場合は、労働局と相談しながら就  
業規則等を改訂しなければならな  
い。中小企業の有期雇用労働者は、  
条件によっては年八十万円の助成金

が得られる。

また、育児を支  
える新たな制度と  
して、今年度から、  
出生後休業支援給  
付、育児時短就業  
給付が創設された。  
園が申請し本人が  
もらえる給付金で、  
退職を防ぐ一助  
となると思われる。  
介護離職防止の  
ための制度も充実  
しており、教職員  
が介護休業を取得  
した場合や、業務  
代替要員を雇用し  
た場合などに助成  
金を取得することが  
できる。いずれの  
場合も育休や介護  
休暇の取得・職  
場復帰を支援する  
という方針を教職  
員に周知しなければ  
ならないので、  
就業規則の見直し  
が必要である。



さらに、職務に  
関連した専門的な  
知識や技能の習得  
のため、園が計画  
に沿って教職員に  
研修の場を設けた  
場合、人材開発支  
援助成金を受ける  
ことができる可  
能性がある。財源  
が雇用保険である  
ため、教職員は雇  
用保険の被保険者  
でなければならな  
い。まず県の労働  
局に人材育成訓練  
計画書を出し、訓  
練終了日の二か  
月以内に必要書類  
を労働局に提出す  
る。

経費助成率は正  
規雇用であれば通  
常で四十五%、賃  
金助成率は一人一  
時間当たり八百円  
である。

さらに、職員配  
置の見直しを図る  
ことで、現場の不  
足感を解消するこ  
とができる。

一 職員一人ひと  
りのタイムスケー  
ジルールに口ス時  
間はないか  
二 その業務を実  
施する「時間帯」  
「担当者」「業務  
内容自体」が  
適切か

適切か





- 三 教育標準時間以外のクラス編成、部屋割りが適切か
  - 四 教職員一人ひとりの出勤時間、退勤時間が適切か
  - 五 園全体の職員数が適切か
- 以上の五つの観点で改善箇所を洗い出し、業務を見直すことで、教育保育の質と教職員の安定を図ることが可能になる。
- いずれにせよ補助金申請に関することや業務改善に関しては専門家に相談していただきたい。

#### 設置者・園長経営研修会

**期日** 令和七年十一月十三日(木)

**会場** ライトキューブ宇都宮  
(大会議室二〇二)

**参加** 七十四名

**テーマ** 「私立幼稚園・認定こども園に関する政策的課題」  
「幼保行政に関する国からの最新情報について」

**講師** 学校法人マハヤナ学園  
認定こども園マハヤナ幼稚園

**理事長・園長** 石田 明義 先生

**写真**

日本の出生数は減少の一途をたどり、二〇二三年には過去最低を記録した。



この深刻な少子化は保育・幼児教育の現場に直接的な影響を与え、保育施設の倒産件数は過去最多となり、幼稚園においても廃園・閉園が相次ぐ状況である。こうした厳しい背景を踏まえ、国はこれまでの待機児童解消を目的とした「量の拡充」中心の政策から、保育の「質の向上」へと明確に政策転換を図った。子どもの数に依存した補助金体系から、質を評価軸とした財源投入

へと移行し、安定的で持続可能な運営体制を整える方針である。

しかし、「保育の質」をどのように定義し、どのように評価するかは大きな論点である。こども家庭庁は第三者評価モデルとして「評価スケール」を活用した取り組みを進めているが、国が定める単一基準で現場を測ることへの懸念は根強い。さらに、二〇二五年度には日本版DBSの導入や処遇改善加算の要件見直し、「こども誰でも通園制度」の検討など、制度改革が連続して進行しており、園運営は大きな転換期を迎えている。

現場では、物価高騰による経営圧迫、人材不足、特別支援児の増加への対応など、複合的な課題が重なっている。また、保護者からは協調性や自制心といった非認知能力の育成を求める声が高まり、園庭の緑地化が子どもの健康に良い影響を与えるといった研究成果も示され、豊かな教育・保育環境の重要性が増している。



現在、幼児教育を包括的に扱う法律は存在せず、教育の位置づけを明確にするため「幼児教育振興法」の制定に向けた議論も進む。少子化が続く中で、保育・教育の価値を高め未来へつなぐためには、国・自治体・各園が連携し、子どもを中心に据えた取り組みを進めることが求められる。

#### 第二回『〇・一・二歳児研修』

**期日** 令和七年九月九日(火)

**会場** コンセーレ(大ホール)

**参加** 七十五名

**テーマ** 「気持ちの伝わりあう  
保護者支援を考える」

**講師** 恵泉女子園大学  
人間社会学部

**写真**

丸橋先生の心温まる励まし  
のお言葉をもらいながら、グループワークを通して  
SNSからの情報  
が溢れている世の中  
であり、年々現場での保護者への細やかな対応が増えてきている。集団生活だからこそころころの出来事や  
困り感の中で、起こった後は受け入れ  
たいが起る前に伝えることが  
できると共通認識につながり、子ども  
も成長することで信頼関係を作る  
ベースとなるようだ。



気持ちの伝わりあう保護者支援とは、日々子どもの姿を通して育ちへの「願い・目標を共有(協力関係になれる)」し、「困りごとを解決する」ことで「信頼関係が強まる」ことが大切であることとご  
教示いただいた。  
会話を通して、  
日々私たちができる  
保護者の最善の支援  
であると受け止め実践  
していきたいものである。



#### 第三回『〇・一・二歳児研修』

**期日** 令和七年十一月二十八日(金)

**会場** コンセーレ(アイリスホール)

**参加** 七十八名

**テーマ** 『保育の場における  
〇・一・二歳児の遊び』

**講師** 玉川大学教育学部  
乳幼児発達学科・教授  
玉川大学院教育学研究科  
・脳科学研究科兼任  
岩田 恵子 氏

**写真**

「子どもは自ら育つてゆく存在」ということから研修は  
始まった。発達には  
一定の順序のなかに  
も子どもそれぞれの  
プロセスがあり、その  
達成の裏には、その子  
なりの訳(好き)がある。  
子ども自身が好んで繰  
り返し、自分で分かてい  
くという過程では、子  
どもが何をしようとし  
ているのか。その子のし  
ていることの意味を探り  
ながら、温かく、応答  
的・受容的に関わり合  
うこと。すなわち「発  
達に応じる」ことが大  
切である。また、赤  
ちゃん同士が相手を  
気遣い、働きかけを  
する実験結果が示さ  
れ、子どもが見よう  
としている世界を  
関わりながら見つけ  
、一緒にその世界に  
出会うような姿勢  
「二人称的アプローチ」  
が重視された。



赤ちゃんは、モノに対しても能動的かつ多様に関わる。自身の働きかけとその多様な結果に、赤ちゃんとの対話と学びがある。赤ちゃんにとって身近にあるモノとのじつくりとした対話は、学びであり遊びでもある。そこでは、赤ちゃんがおも



るがる世界の豊かさに気づき、共にその世界をおもしろがれる姿勢が求められる。

子どもの世界をとおもしろがりながら対話を重ねていくことは「学び」へと繋がる。また、保育者自身の学びや視点の変容も促し、出来事の拾い方・作り方で「話題（エピソード）」も変わり、子どもが多様に「見えて」くるようになる。

可視化のツールとしてドキュメンテーションとともに紹介された保育ウェブは、子どもの遊びや活動において大切にしたいキーワードを中心に、子どもの興味・関心、予測した姿など、連想される様々な事柄を連続的・発展的に書き加えていくものである。可視化により、子どもの興味・関心、実態に沿った計画にも役立つ。また、複数人で書き込めるため話し易く、互いに共有や考え合い、振り返りができる。また、引継ぎや記録、日誌にも用いられる。

乳児の発達や理解を基に、乳幼児の世界をともに味わうことの意義や面白さを知るとともに、より深くその世界を垣間見るための手立てを学べる機会となった。

### 第三回 保育テクニカル講座

期日 令和七年十月十五日（水）

会場 パルティ（パルティホール）

参加 八十五名

内容

心のスキップ〜心をつなぐ楽しい手あそび・歌あそび  
表現遊び研究家

講師

中澤 淑江氏

日々の保育の中でよく取り入れられている手あそびや歌

あそびは、子どもたちの前に立つ先生にとつて必要なスキルの一つだ。今回は、表現遊び研究家の中澤淑江氏に手あそび・歌あそびを学んだ。まさにテクニカル講座にふさわしく、座学はほぼなく、手あそび・歌あそびを数多く紹介していただいた。ちなみに中澤氏は、かつてNHKにて放送されていた「にっこにこ、ぶん」のボロリの中の人である。



開始早々に中澤氏から、筆記用具等を置いてくるよう話があった。つまりここからは何かをメモしたりすることなく、体を動かし続けるということだ。広い体育館のようなスペースで、まずはアイスブレイクをかねて二人で握手。しかも、三回までのうちで、お互いが何回握るかを伝えず握り合う。これだけでも十分打ち解け、すぐに活動に移る。まずは「さあ みんなで」の曲から、一列に並んで隣の人の肩や膝、さらに一人先の人を叩いたり、アイスブレイクで和んだ関係の先生たちは楽しそうに始められた。次は「えはがきやぎさん」で、背中に文字を書いたり切手を貼ったりと、手紙を書く仕草が面白い。子どもたち同士でも、手紙や文字がわからなくても友だち同士で楽しくできるだろう。



続いて二人組で「こぶたさんのおうち」を歌いながら行った。親子体操などでも使えるシンプルな活動だが、三匹の子ぶたなどの劇でも使えるような曲で、こちらも楽しんで行えた。

最後は「おやさいむらの はやおきさん」となっとうとうさん。食べ物の手あそびで、歌に合わせて野菜に変身、食育にも繋がるような楽しい手あそびであり、また年齢ごとに変化させたり、野菜の種類を変えるアレンジが可能であったり、一つ覚えるだけで色々な場面で活用できる手あそびであった。

今回のテクニカルは終始身体を使っての手あそび・歌あそびだったが、中澤氏は楽しいだけでなく、話があまぐでできない子や、友だちと関わるのが苦手な子でも、やっていくうちに少しずつ打ち解けていけるための方法として、自身の話も交えながら多くの手あそび・歌あそびを教えてくださった。

### 第二回 保育セオリー講座

期日 令和七年九月三日（水）

会場 コンセーレ（大ホール）

参加 八十八名

内容

「子ども理解を深める記録と実践」遊び心ある保育アセスメントのために〜  
白鷗大学 准教授

講師

山路 千華氏

保育アセスメントとは、子どもの発達状況や課題を客観的に捉え、評価し、

必要な支援につなげていくことである。

保護者・職員・専門



機関と情報を共有し、子どもの背景や性格、その子なりの姿を理解することが土台となる。また、自分の保育をどのように評価し、どのように子ども理解につなげていくかを考える姿勢も大切である。

保育の現場は、日々変化が大きく、常に臨機応変な判断が求められる。そのため、PDCAで計画を立てても、実行時には状況が変わっていることが多い。そこで注目されているのがOODA（ウーダ）である。これは「観察（Observe）」から始まるため、子どもの変化に即応でき、スピード感のある保育現場に向いているとされている。

また、保育の振り返りには、SOAPの視点を取り入れることで、記録が整理しやすくなり、共有の際にも要点が伝わりやすくなる。保育者の主観と子どもの客観的な姿をバランスよく捉えられる方法であり、日々変わる子どもの姿に寄り添った振り返りが可能になる。

とはいえ、保育の現場は忙しく、記録に多くの時間を割くことは難しい。そこで、写真や動画などデジタル機器を活用し、「チャチャッと」短時間で記録できる方法を組み合わせること、負担を減らしながら継続できるアセスメントにつながる。

最後に重要なのは、記録を「残して終わり」にせず、見える化して共有すること。園全体で記録を活用し、子ども理解を深めることで、保育の質の向上に結びついていく。





## 資質向上研修

【期日】 令和七年九月四日（木）  
【会場】 武蔵野東第一・第二幼稚園  
【参加】 二十一名

今回の視察先は、東京都武蔵野市の学校法人武蔵野東学園が運営する武蔵野東第一・第二幼稚園であった。

武蔵野東学園は、昨年の「保育セオリー講座」でインクルーシブ教育についてご講話いただいた加藤篤彦先生が学園長を務める学校法人で、研修会参加者からレポートで「加藤先生の園をもっと知りたい」「実践の様子を、直接見てみたい」との声が多く上がっていたこともあり、今回の視察研修をお願いした。実際に視察に参加された方は前回の研修会で学ばれた方も多く、講話と視察の相乗効果でより深い学びとなった。

武蔵野東幼稚園は設立当初よりASD児を受け入れ、混合教育（インクルーシブ教育）を実践されてきた。ASD児のクラスがあり、その特性や発達段階に合わせた教育がなされているだけでなく、ASD児が通常クラスの保育に参加し、園行事や日常の園生活で一緒に過ごす場が設けられる、真のインクルーシブ教育を六十



年以上も実践されてきた。その教育を求め、全国各地からASD児の保護者が転居をしてまで入園してくる。また、武蔵野東学園は、幼稚園だけでなく小学校、中学校、

高等専修学校も運営され、そのどれもが「卒園・卒業後に通える学校を作ってほしい」という保護者の要望から設立され、卒業後には社会的自立が図れるような一貫した教育が行われている。

視察は、午前中に年中・年長児とASD児が通う武蔵野東第一幼稚園、午後は三歳未満児、年少児が通う第二幼稚園を見学し、最後に加藤先生にご講話をいただいた。第一幼稚園では、ASD児クラスでの保育の様子や通常児との交流の様子を見たが、最初に「ASD児が共に生活することで、互いに落ち着いて生活できる」との説明を受けた。にわかには信じられないその光景を目の当たりにして感銘を受け、定型発達児との交流の自然さに、インクルーシブ教育の理想を見たような気がした。園訓の一つである「みんななかよし」の「みんな」には多様な子ども像が含まれており、武蔵野学園らしい教育を物語っていた。また、先生方で話し合っている今年の保育テーマを決め、そのテーマに沿った環境設定と保育が進められている様子も勉強になった。



## 青年部県外視察研修会

【期日】 令和七年十月二十日（月）  
【会場】 静岡県浜松市

なかざわこども園  
こども園ことり  
なごみこども園

## 【参加】 十二名

一日目のなかざわこども園では、まず最初に子どもたちが室内外とも裸足で活動して足裏の感覚を大切にしており、真冬以外は裸足で活動することのこと。

園庭には高さ百五十センチメートルの「タワー」と呼ばれる遊具があり、年長児が力強く登る姿が印象的であった。園庭は六年前まで平坦だったが、一級建築士でこども環境アドバイザーの井上寿氏と共に改修され、「食育」「匠」「さんぽ」「絵本」「集団」「アトリエ」「粘土」などのエリア保育が展開されている。



制作活動は一斉に行わず、子どもが自分のタイミングで取り組めるよう配慮されていた。運動会では保護者も参加し、写真撮影は園が依頼したカメラマンのみが行うなど、自然体の子どもを大切にしている姿勢が感じられた。園庭の遊具には木材を多く使用し、先生と保護者が協力してひさしをDIYするなど環境づくりに工夫が見られた。



二園目のこども園ことりはなかざわこども園と経営者が親子で、同じ教育方針だが地域に合わせた教育を実施している。登園時間を八時三十分までとし、

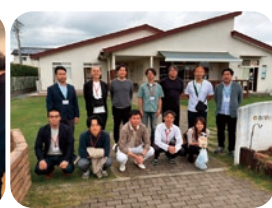
遅れた場合は連絡を入れるなど生活リズムを重視している。毎朝年齢ごとに体操を行い、体をほぐしてから遊びに入る流れが定着していた。

職員は毎日十四時に会議を行い、時間と場所を固定した配置で子どもを支えている。行事や参観も保護者参加型で、乳児と幼児の園庭を分けつつ、今後の在り方を模索している様子であった。

理事長の「何でも自由ではなく、一つでも良い体験をさせたい」という言葉が印象的であった。

二日目に訪問したなごみこども園では、園長の志賀口先生による講話と園内視察を通じて保育と経営の両面で学びを得た。

保育では、子どもの生活リズムに合わせて給食や午睡の時間を個別に対応し、遊びと生活の個性性を高める実践が行われている。園内では、子どもが安心して主体的に遊べる環境が整えられ、保育者は丁寧な寄り添っていた。



経営面では、園内で行っていた子育て支援を園外に移し、カフェと絵本・おもちゃの店を併設したことで利用登録者数が約七倍に増加。「やっていることが社会に見えることが重要であり、見せる努力が必要」という言葉が印象に残った。

## 令和 8 年度 予算要望書

団体名：一般社団法人栃木県幼稚園連合会  
代表者名：理事長 船田 弘和

要 望 事 項	継・新	現 行	要 望
<p><b>【要望1】 幼稚園運営費補助金の増額（私学助成幼稚園）</b></p> <p>運営費補助金の増額は、私学助成幼稚園の経営の安定を図り、教育環境をさらに充実するためには欠かせません。少子化の進行等により、私学助成20園のうち、16園が3年連続の赤字となっており、令和6年度は19園が赤字決算となりました。私学助成幼稚園は、このような経営環境の中にあっても、県内の子どものために、教育の質の向上を図っております。</p> <p>こうした経営状況では、月額2,000円程度の保護者負担の増額を求めざるを得ない段階に来ているというのが正直なところですが、物価高の現在、保護者にそれを求めることは非常に困難です。</p> <p>文科省からは令和7年度、前年比1.5%増の補助単価が示されており、これを踏まえれば年額3,000円/園児1人、月額250円/園児1人の増収が見込まれます。今年度、県単補助金として年額10,000円/園児1人をいただいておりますが、令和8年度については、月額1,500円/園児1人の県単補助を上乗せいただき、県単補助を年額28,000円としていただくことを要望いたします。</p>	<p>継続 増額要望</p>	<p>園児1人当 / 令和7年度 <b>212,900円</b> 国庫補助+地方交付税 202,900円</p> <p><b>県単補助 10,000円</b></p>	<p>園児1人当 / 令和8年度 <b>230,900円</b> 国庫補助+地方交付税 202,900円 (R7年度)</p> <p><b>県単補助 28,000円</b></p> <p>県の増額予算分 = 18,000円×1,945人 = <b>35,010千円</b></p>
<p><b>【要望2】 幼稚園運営費補助金（処遇改善加算分）県負担分を2/3に</b></p> <p>新制度幼稚園・保育所・認定こども園では、園の負担無しに職員の見遇改善が実現しています。一方、私学助成幼稚園では1/3を負担することが求められています。このことが赤字経営の私学助成幼稚園では大きな負担となり、残念ながら教職員の処遇改善がなかなか進まない状況となっております。一般般、私学助成幼稚園の教職員と認定こども園の教職員の給与比較（サンプル調査）を行ったところ、基本給での差はほとんど無かったものの年収ベースでは50万円程度の差があることがわかりました。同じ県内の幼児教育施設で働いているにもかかわらず、施設タイプの違いにより年額50万円もの差が生じているのです。</p> <p>令和7年度、栃木県では私学助成幼稚園の処遇改善基準額について月額9,000円から上限無しへと制度の見直しをしていただきました。これにより、施設類型による差を縮めることができる制度となったわけですが、新制度においても、処遇改善額の1/3については自園負担となり、やりたくても財政上無理というのが私学助成幼稚園の実態の声です。</p> <p>つきましては、園負担を0にして私学助成幼稚園全国で教職員の処遇改善を実現できますよう、県の負担分を2/3に引き上げてくださるよう要望します。</p>	<p>新規</p>	<p>私学助成幼稚園における処遇改善に対し、国庫負担1/3、県負担1/3補助</p> <p>県予算 33,792千円 (うち、県負担1/2) <b>16,896千円</b></p>	<p>私学助成幼稚園における処遇改善に対し、国庫負担1/3、県負担2/3補助</p> <p>県予算 50,688千円 (うち、県負担2/3) <b>33,792千円</b></p>
<p><b>【要望3】 子だくさん応援 多子世帯保育料・給食費免除事業費の創設</b></p> <p>栃木県では、国の施策に先駆け、平成28年度に第3子保育料免除事業費が創設され、18歳未満の兄弟から数えて第3子以降の子どもの保育料が無料となり、転入者の増加につながりました。さらに令和6年度からは第2子保育料が無償化され、子育て世帯の経済的負担が軽減されました。</p> <p>要望3は、これらの事業を「子だくさん応援 多子世帯保育料・給食費免除事業費」に発展させるという提案です。</p> <p>具体的には、「18歳未満の子どもが3人以上いれば、就学前の施設に通う子どもが何番目の子どもであるかにかかわらず、3～5歳の副食費を無料にし、0～2歳の保育料を無料にする」というものです。子だくさんの世帯を応援するメッセージが明確に伝わる事業であり、3人目を生もうという気持ちにさせる画期的な事業であります。どうか、国・他県に先じいた施策として発表し「子育てするなら栃木県」をアピールして「とちぎで子育てしたい」を実現していただくことを要望します。</p> <p>栃木県では、「子だくさんが推奨されている」、言い方が悪いかも知れませんが「子だくさん家庭が得をする」「子ども2人より3人いた方が経済的に得をする」、そんな施策を実現し、強くアピールしていただくことを願います。</p>	<p>新規  発展的 継続</p> <p>→転入者 増加</p> <p>→もう一 人！ 促進</p>	<p>第2子以降保育料免除</p>	<p>3人以上子どもがいれば第1子も第2子も、保育料と副食費が免除になる</p> <p>令和6年8月1日時点で当該事業の対象となる園児数は、年長児697名、年中児452名、年少児287名、合計1,437名でした。令和8年度も同程度の人数と考えると、月額4,500円×1,437名＝6,467千円×12カ月＝<b>年額77,598千円</b></p> <p>これに、3人以上の子どものいる0～2歳の第1子、第2子の保育料分を足せば本事業の総予算が算出される。数はそれほど多くないことが想定されます。</p>
<p><b>【要望4】 子育て支援事業等に対する補助金の増額</b></p> <p>① 仕事と子育ての両立のために、預かり保育は大変重要です。幼稚園が行う預かり保育に対する補助金の増額を要望します。</p> <p>② 未就園児親子教室等の子育て支援活動を通じ、幼稚園が地域の子育ての拠点として、子育てにおける精神的負担の軽減を図る充実した機能を提供できるよう、補助金の増額を要望します。</p>	<p>継続</p> <p>継続</p>	<p>わんぱく保育推進事業</p> <p>子育てランド事業</p>	<p>わんぱく保育推進事業</p> <p>子育てランド事業</p>
<p><b>【要望5】「栃木県幼稚園連合会補助金」の継続</b></p> <p>幼稚園教諭・保育教諭の資質向上は、教育・保育の質の向上に直接関わります。本連合会では、幼稚園・認定こども園の教諭・保育教諭の研修実施、設置者・園長の研修実施を通じて、積極的に教育・保育の質の向上を図っています。</p> <p>また、本連合会は、「処遇改善に係るキャリアアップ研修」の実施団体として認定（研修実施主体認定）を受けていることから、現在行っている研修については、分野・回数・時間ともに充実した内容で実施しており、応分の経費がかかっているところです。つきましては、本連合会の研修会実施に対する補助「栃木県幼稚園連合会補助金」を継続していただくことを要望します。</p>	<p>継続</p>	<p><b>7,000千円</b></p>	<p><b>7,000千円</b></p>

●令和 8 年度 予算要望書について

上記5つの要望が新年度の予算獲得に少しでも反映されるよう、年明け1月15日に福田富一知事と池田忠県会議長に予算対策要望書を提出・陳情してまいります。

柗幼連と柗私幼振興財団そして柗幼P連。この3団体が強くスクラムを組み少しずつでも前に進み結果を出し続けているのは、各園の設置者・園長のご理解、ご協力はもとより先生方、保護者のおかげです。

よりの確で効果的な振興活動となるよう引き続き取り組んでまいりますので、今後とも皆様の積極的なご協力をよろしくお願い申し上げます。

（振興委員長 富川 将）





## 幼児教育センターだより



### 幼稚園等教職五年目研修第二日 保育所保育士研修「五年目」

保育所保育士研修「五年目」と合同で、九月二日に実施しました。

施設類型や国公私立の別なく、五年目ならではの考えや経験、実践等を共有しながら、研修を進めました。

始めに、大豆生田啓

友 幼児教育センター顧問が、オンラインにて、「子ども主体の保育とは」の講話を行いました。



その後、「一人一人を大切にしたい集団づくり」「特別な配慮を必要とする子どものために」「良好な関係を築く保護者との関わり」について講話・演習を行いました。

「子どもの特性、子どもらしさを理解し肯定的に捉え、柔軟な視点、価値観をもって関わっていききたい」「保護者の気持ちを受け止めつつ、園の様子を日頃から伝えていき、子どもの成長を保護者と共に見守って



いききたいと改めて感じた」等の感想があり、次のステージに向けて決意を新たにしていきました。更なる活躍を期待しています。

### 合同研修「幼小」

十一月二十五日に総合教育センターを会場に実施しました。幼小の先生方が対話を通して子どもの育ちを共有し、架け橋期の教育を充実させるための資質・能力を養うことが目的です。

まず、「同種の活動から見ると架け橋期の教育」と題して講話を行い、その後はグループ協議を行いました。

同種の活動に視点を置き、「おもしろい子どもの姿」を出し合う中で、「共通した子どもの姿や学び」を見付け、架け橋期の子どもの学びを支える環境や先生の関わりについて話し合いました。

目の前の子どもたちの姿を思い浮かべながら幼小の先生方が自由に話し合う中で「先回りしすぎず、見守りたい」「子どもの『やりたい』を引き出す保育をしていきたい」など、改めて大切なことを確認したり新たな視点をもったりすることができました。

今回の研修

で学んだことを園内で共有し、園全体で架け橋期の教育について考えていただければと思います。



※各市町で同様の研修を実施している場合、そちらへの参加をもって、合同研修【幼小】の参加としています。



受講者の感想の一部を紹介します。

子どもたちの気付きに耳を傾けたい。そして、子どもの声から活動へつながって、一つ一つの活動にたっぷり時間をかけていきたいと思った。(幼)

子どもの行動や考えを「おもしろい」と思って肯定的に関わることが、特に架け橋期の子どもたちに関わる教員には必要なことだと思った。(小)

幼小で対話する中で、子どもの学びが分かっていることが分かった。これからも、小学校や他園の先生方と対話していきたい。(幼)

教員が与えすぎたり話しすぎたりすることがあったので、子どもたち自身が気付き体験できるような環境づくりを意識していきたい。(小)

### 中堅幼稚園教諭等資質向上研修

在職十一年目を迎える幼稚園教諭、幼保連携型認定こども園保育教諭を対象に、六日間実施しています。「園のカリキュラム・マネジメント」「子ども主体の保育」「幼小の連携・接続」「特別な配慮を必要とする幼児・園児の支援のために」「子育ての支援の取組」等、様々なテーマの下、計五十五名が熱心に研修に臨んでいます。



第三日は、和洋女子大学人文学部こども発達学科教授 矢藤誠慈郎先生より「園の安全管理と安全教育」と題して講話をいただきました。

### 令和七年度

### 栃木県教育研究発表大会

#### 〈幼小連携部会〉

令和八年二月三十日(金) 三部  
オンラインによる開催

#### テーマ

「架け橋期の教育実践」私が変わる、子どもが変わる」

#### 発表①

「遊びでつなぐ架け橋期」楽しいはひらめきの宝箱」

#### 発表②

「架け橋期における教育のつながり」を考える「主体的な活動や経験を つなぐ」

★小学校と保育所の先生に御発表いただきます。  
★栃木県総合教育センターの＼＼のサイトより  
お申し込みください。

第五日は、「指導計画と幼児・園児の姿とのつながり」をテーマに、宇都宮大学共同教育学部附属幼稚園で実施しました。

受講者からは、「安全管理の在り方について、園内研修を通して組織全体で考えていきたい」「中堅の立場を生かし、教育課程や指導計画について園全体で評価・改善ができるようにしていきたい」等、自身ができる取組についてマネジメントの視点からの感想が多く見られました。園の中核として研修成果を園に還元していけることを期待しています。





## こども政策課だより

### 一月始業日現在の園児数調べの実施について

幼稚園運営費補助金の変更交付に当たり、一月上旬を締め切りとし、一月の始業日現在における在園児数等を御報告いただく予定です。  
詳細については、別途文書でお知らせしますので、期限内の提出をお願いします。

### 幼稚園運営費補助金及び幼稚園教材費等補助金に係る変更交付申請書の提出について

本年度に入園した満三歳児分等の一般補助や特別支援教育と地域子育て推進事業の特別補助に係る変更交付申請書（新制度移行園は交付申請書）については、幼稚園運営費補助金、幼稚園教材費等補助金ともに一月下旬に御提出いただく予定です。  
詳細については、別途文書でお知らせしますので、期限内の提出をお願いします。

### 地域子育て推進事業に係る実施記録について

わんぱく保育推進事業を実施して

いる園においては、対象園児が保育された事実確認をするため、実施記録（県様式）の外、園で管理している預かり保育の記録（名簿等）を実績報告書提出時に添付していただきます。

また、子育てランド事業を実施している園においては、各実施事業の参加人数や活動内容等の記録を実績報告書提出時に添付していただき、必ず記録を取っていただくようお願いします。

いずれも補助金の交付に係る根拠資料となるものですので、漏れなく県へ御提出いただくよう準備をよろしくお願いします。

### 園舎の耐震化の促進について

東日本大震災以降、園舎の耐震診断の実施・耐震化がより一層求められています。

令和七年度以降も引き続き、国庫補助制度の活用による耐震化を促進したいと考えておりますので、耐震化（建替・補強等）を予定する場合は、市町の担当課も含めて早めに御相談ください。よろしくお願いいたします。

今後とも、園舎の耐震化に取り組んでいただき、安全・安心な教育環境の整備をお願いします。

## 令和八年一月～三月までの事業予定

1月7日	※中堅幼稚園教諭等資質向上研修
1月15日	※幼児期の特別支援教育研修
1月21日	※幼稚園等教職5年目研修
1月22日	資質向上研修（幼小連携）
1月23日	設置者・園長研修会
1月27日	※幼稚園・こども園保育所主任等研修
1月30日 ～31日	※栃木県教育研究発表大会
2月6日	※教育実習の在り方研究部会
2月17日	幼小接続推進者研修 ※は幼児教育センター事業

### 令和八年度 主な事業計画

5月21日	栃幼連 定時総会
7月5日	合同就職説明会
7月10日	栃幼PTA連総会
7月30日 ～31日	
第39回	全日私幼関東地区 教研大会（埼玉）
8月5日 ～7日	第73回 栃木県幼稚園教育 研究大会

### 慶事

塩谷地区 十一月八日  
認定こども園すみれ幼稚園  
創立五十周年記念式典・祝賀会

## 編集後記

高校生の長女が「大学でも音楽を続けたい」と言っている。しかし音大で専門的に学ぶのではなく、自由にピアノを弾く、ドラムを叩く、曲を作りそれを歌う。自由に音楽を表現したい。音楽が好き。音楽には人の心を動かす力がある。自分の音楽でたくさんの人を楽しませたい。自分も豊かな気持ちになりたい。そう考えている。彼女が音楽に接したのは、幼稚園の年中から習いはじめたピアノがはじまりだ。それから十三年、いま彼女の中で、音楽は生きる希望や支えとなっている。

ドジャースの大谷翔平選手の父の言葉に「私は翔平にスパルタや強制をいちどもしたことはない。野球には人の心を動かす力がある。翔平には野球を心から好きであり続けてほしい。」スポーツにも多くの感動や希望、人の人生を変える力さえ持っている。幼児期にそういうものに出会うことは、とても大きな意味を持つ。

子どもはいつの時代でも、どんなものにも興味を示し、意外なものに夢中になったりする。それが将来職業になり生きる支えになることがある。出会いって大切。日々の保育で、目の前の子どもたちの姿に、将来どういう人生が待っているのだろう。想像を巡らすと楽しみで仕方がない。

（認定こども園にしだ幼稚園 西田 知生）